

強さの裏に未熟さ 優勝なき横綱

元双羽黒が死去

評伝

元横綱双羽黒の北尾光司さんが亡くなった。「未完

の大器」という意味では、双羽黒の右に出る力士は思いつかばない。

昭和の終わり、当時破竹



1986年、新番付前に記者会見する新横綱の双羽黒と立浪親方(左)

の勢いだったハワイ出身の巨漢小錦にも体負けせず、圧倒した。懐の深さを生かした取り口はスケールの大ききを感じさせた。

社会面参照

横綱審議委員会は「2場所連続優勝か、それに準じる成績」との昇進の内規を大幅に広げた解釈をし、優勝に次ぐ成績と決定戦まで進んだ優勝同点の2場所の成績をもって推薦の答申を出した。理由は一人横綱だった千代の富士の後継者として、時の春日野理事長(元横綱栃錦)ら関係者の強い推薦があったからだ。角界全体に品格より、強さを優先させる土壌があったのは否めない。

けいこ嫌い。自己主張する新人類。まだ珍しかったパソコンを使いこなすパソコン横綱……。様々な形容があつたが、残念だったのは強さの裏側にある人間性の未熟さだった。

昇進後、支度部屋で付けた人が「こんなやつ、負ければいい」と吐き捨てるのを聞いた。部屋ではその頃はやっていたエアガンで若手を追い回したりしていたという。付け人が尊敬し、応援する他の関取らとは違つた。妻が垣間見えた。

土俵を去る時も「親方と相撲道のこと口論になつた。私と師匠の考え方が食い違い、師匠にはついていけないと思つた」と弁明。横綱としての責任に自らが触れることはなかった。

地方を認めていた千代の富士の言葉が象徴的だ。「もし、双羽黒の廃業がなかったら、自分の通算1千勝や31度の優勝も達成出来なかつたかも知れない」。24歳だった彼が期待通りに成長していたら、相撲界の歴史も変わっただろう。

「心技体」の「心」が整わぬまま、角界を去つた大器。その後、横審は昇進には内規に照らして最低1回の優勝を条件に、厳しく吟味する方針が固まつた。(竹園隆浩)